

島津藩の浄土真宗弾圧 関連年表

【仏教公伝 日本仏教の源流が流れはじめる】

- 欽明 7 (538) 年 仏教公伝。朝鮮半島の百濟・聖明王より第29代欽明天皇に經典・仏像・仏具が贈られる。朝鮮半島や中国大陸からの仏教伝来は、和紙・墨・すずりの製造技術の伝来もふくんでおり、日本人の識字率の向上や、平安文学が生まれる基礎ともなった。仏教伝来がなかったら、日本には「お盆」も「お彼岸」もなかった。
- 推古 元 (593) 年 第33代推古天皇（日本初の女帝）即位。聖徳太子を摂政に任命。
- 推古 2 (594) 年 三法興隆の詔。朝廷が「仏・法・僧」の興隆を認め、日本仏教が始動しはじめる。推古天皇在位36年、聖徳太子在位30年。この胎動期に仏教国日本のレールは敷かれた。親鸞聖人は聖徳太子のことを「和国のお釈迦様」と慕われた。

【親鸞聖人のご誕生 日本仏教の本流は 浄土仏教へ】

- 承安 3 (1173) 年 親鸞聖人誕生。5月21日。（御同朋御同行の教え 在家仏教の誕生）
- 弘長 2 (1263) 年 親鸞聖人往生。1月16日。90歳。
- 仏教公伝以来、日本仏教の本流は自力聖道門の修行仏教であったが、平安時代の法然上人、鎌倉時代の親鸞聖人の出現によって、日本仏教の本流は「阿弥陀如来の本願を信じ、お念仏をととなえ、みな平等にお浄土にうまれる浄土仏教」に変わっていった。身分も職業も、老若男女の差別も超えた仏教が始まった。とくに親鸞聖人の浄土真宗は、来世の極楽往生の救いだけでなく、一人ひとりのそのまものがゆるされて、今生を強く明るく生き抜く仏教へと大脱皮をとげた。

【蓮如上人の登場 日本仏教の主役は 大衆へ】

- 長祿 元 (1457) 年 本願寺第8代蓮如上人 法灯を継承する。（43歳）
- 長享 二 (1488) 年 加賀の一向一揆 百姓のもちたる国の出現、天正8（1580）年まで。
- 明応 8 (1499) 年 本願寺第8代蓮如上人往生。3月25日。85歳。九州への伝道がはじまる。「御文章」によるお手紙伝道。「正信念仏偈」の開版による本願寺宗風の確立。本願寺教団の大躍進は、蓮如上人のご苦勞によって遂げられた。
- 永正 3 (1506) 年 2月19日。第9代実如上人、薩摩千野湊（串間市）の釈明心に本尊を授く。古文書初出の薩摩開教。この頃すでに浄土真宗が南九州に伝播し、本願寺と連絡をたもち法名をいただいた門徒が、薩摩に存在していたことを示す御絵像である。

【島津藩・相良藩の浄土真宗弾圧はじまる】

- 天文24 (1555) 年 ■相良藩（人吉藩）相良晴広・法度式目41ヶ条、浄土真宗禁止令を發布。
- 元亀 元 (1570) 年 織田信長、石山本願寺（第11代顕如上人）を攻める。（石山合戦の発端）
- 元亀 2 (1571) 年 織田信長、伊勢長島の一向宗を攻める。
- 天正 8 (1580) 年 第11代顕如上人、信長と和睦。石山本願寺を退去。（石山合戦の終結）
- 慶長 2 (1597) 年 ■島津藩（薩摩藩）島津義弘、島津家20ヶ条、浄土真宗禁止令を發布。
- 慶長 4 (1599) 年 都城（庄内）の乱。島津本家（島津家久・鹿児島）と伊集院家（伊集院忠真・都城）との内乱。関ヶ原の合戦は一年前に都城で始まっていた。九州の覇者・島津藩の最有力家臣である伊集院忠棟をみずからの勢力下におきたい豊臣秀吉の野心。島津本家にこれを打たせて、天下取りを有利に運びたい徳川家康の画策が衝突したのが、都城の乱の遠因。この時、忠棟が本願寺から譲り受けた親鸞聖人御真影の木像は都城城中にあった。1600年10月21日、関ヶ原の戦い。

都城の乱

- 慶長 7 (1602) 年 伊集院忠真が島津忠恒に野尻で家臣もろとも謀殺される。8月17日。
- 寛永11 (1634) 年 日州山之口にて真宗弾圧。身分・禄高・屋敷没収・移百姓などの仕置き。
- 慶安 2 (1649) 年 宮原真宅（釈宗教）磔殺（殉教者の初見：『本願寺鹿児島開教百年史』）
- 貞享4年 (1687) 年 8月1日。人吉藩で門徒（親子孫14人）が入水心中。「14人淵」の史跡あり。

【宝暦治水 島津藩は借金大国へ転落 浄土真宗弾圧いよいよきびしく】

- 宝暦 4 (1754) 年 幕府の命により、島津藩はやむなく借金財政で木曾川治水工事を行う。家老 平田鞆負（総奉行）以下八十名余の殉職者を出す。島津藩は72万石（粃高）で借金大国への転落。年貢は全国一高い、八公二民。

【仏飯講の結成 お念仏の声が南九州一円にひろがる】

- 安永 2 (1773) 年 第17代法如上人、日向国内場仏飯講を認許（願主 三股蓼池村の藤左衛門）

寛政 5 (1793) 年 第18代文如上人、仏飯講に阿弥陀如来絵像、親鸞聖人・蓮如上人御影、文如上人御影、本如上人御影を下附。(願主 三股樺山村の三左衛門 法物：安楽寺蔵)
 寛政10 (1798) 年 仏飯講は、曾於郡・西諸郡地方に拡大。講員、数千名。
 日向諸郡の領民2800人が飢肥領に信教の自由を求めて逃亡。
 文政 2 (1819) 年 第19代本如上人、日向国内場仏飯講に親鸞聖人伝絵四幅(正定寺蔵)を下附。

【天保の大弾圧 暗黒の世にも念仏の光はともりつづけた】

天保 元 (1830) 年 島津藩の財政大改革に着手。借金五百万両。250年賦、無利子償還。調所広郷。
 天保 2 (1831) 年 本願寺財政改革。島津藩は、懇志摘発のため京都・肥後にスパイを常置と決断。
 天保 6 (1835) 年 本願寺使僧、妙光寺・浄泉寺・安楽寺が薩摩に入る。島津藩は取締りを強化。
 天保12 (1841) 年 末吉村の直右衛門、縄瀬の渡し場で逮捕。翌年4月23日、自刃。44歳。
 天保14 (1843) 年 島津藩領内の真宗門徒に弾圧を加える。摘発門徒14万人。
 嘉永 2 (1849) 年 本願寺使僧、筑前明勝寺探玄を薩摩に入る。『薩摩国諸記』
 嘉永 6 (1853) 年 高崎村江平の中山小次郎、上京の途中、筑後の松崎で逮捕。8年間牢獄監禁。
 「薩摩国諸記 天保14年8月」によると、島津藩内で70余の講組織が露見し、
 本尊約2千幅が押収、14万人の門徒が検挙されたと記録。江戸時代後半期には、
 信者集団は薩摩藩本土および上下甌島・琉球まで拡大していた。

【安政の大弾圧 本願寺と薩摩門徒の呼応】

安政 元 (1854) 年 第20代広如上人の密命をうけ、乗海寺釈無涯(真徳寺釋了随)、薩摩に潜入。
 安政 3 (1856) 年 広如上人、宗祖600回大遠忌お待ち受けの消息を披露。
 安政 3 (1856) 年 ■佐々木深道(大学) 清武村安楽寺住職に就任。都城に潜入し布教を続ける。
 安政 4 (1857) 年 3月23日、阿弥陀堂の修復始まる。■乗海寺釈無涯 殉教。5月5日。33歳。
 安政 5 (1858) 年 3月23日、御影堂修復始まる。万延元(1860)年9月、御影堂修復成る。
 文久 元 (1861) 年 3月18日～28日、宗祖親鸞聖人600回大遠忌を修す。
 「とくに嘉永3(1850)年から安政4(1857)年にかけて、京都の西本願寺では御影堂の大修復を行ったが、このときも多額の賦課金を、真宗禁制下の薩摩の隠れ念仏の信者から調達していた。驚くべきことに、総額1万1千両という莫大な経費の約1割の金額を、薩摩の秘密講だけで請け負ったという」
 五木寛之著『日本人のこころ 2』

【薩摩の歴史 その光と陰】

江戸時代から明治維新までの薩摩の歴史をみると、薩長連合が中心となって幕府を倒し明治維新をやりとげ、西洋文明を積極的にとり入れ日本の近代化をはかった輝かしい光がある。しかしその背後には、徹底的な農民収奪支配と浄土真宗弾圧の陰がある。過酷な離島支配・琉球支配にも共通する人間差別の冷たく暗い支配構造が見える。薩摩の光と陰は、明治時代になっても引き継がれ、「廃仏毀釈 = 寺院の土地・田畑を没収すれば、藩は10万余石の増収がはかれるという計画的な仏教破壊運動」へとつづいていった。

明治 元 (1868) 年 明治政府、神仏分離令を發布。廃仏毀釈おこる。島津領内1066寺(日向諸県273寺を含む)が灰燼に帰した。僧侶2964人は還俗。明治6年まで続く。このように仏教排斥、人命軽視で始まった明治時代は、日清・日露戦争～太平洋戦争まで、終わりの見えない戦争の泥沼の時代へと盲進していった。わたしたち現代日本人はまだ、明治以来、学校教育・社会教育から仏教教育(生命の尊厳の教育)を排除しながら西洋偏重主義を崇拝してきた後遺症のただ中にある。推古天皇以来、歴代の天皇家は仏教に深く帰依してこられた。江戸時代の最後の孝明天皇まで仏教でお葬式をつとめ、陵は京都市東山区の泉涌寺にある。

明治政府は神道国教化政策を行うため神社と寺院を分離し、仏教を排除しようとした。島津藩では計画的な寺院破壊へと発展した。

【浄土真宗さつま開教 寺院建立のうねりへ】

明治 4 (1871) 年 11月 都城県が発足。(太政官布告595号)日向国南部と大隅国東部の地域。
 明治 6 (1873) 年 1月15日 都城県と美々津県と合併して宮崎県が発足。大隅国は鹿児島県に。
 明治 9 (1876) 年 8月21日 宮崎県が鹿児島県に吸収合併され、宮崎支庁が置かれる。
 明治 9 (1876) 年 9月5日 鹿児島県参事田畑常秋が信教の自由を布達。島津藩念仏禁制解禁。
 明治 9 (1876) 年 10月31日。本山執事・大洲鉄然ら薩摩開教本隊に、薩摩開教の山命下る。
 明治10 (1877) 年 西南戦争。西南戦争により当時鹿児島県であった宮崎県域も戦場となる。戦後、鹿児島県が薩摩・大隅の復興を優先したことへの反感が宮崎県独立の一因となる。第21代明如上人は鹿児島へ戦後支援を行い開教への布石を打つ。都城へ本願寺説教所の創立。門徒たちの寺院建立運動へと広がっていく。

宮崎県の独立分県

明治16 (1883) 年 5月9日 宮崎県が鹿児島県から独立分県。現在に至る。